

第三節 平家一門の盛衰と鈴鹿郡

第一項 平氏政権と鈴鹿郡

平氏政権と殿下乗合 平治の乱の翌年、永暦元年(一一六〇)六月、平清盛は正三位に叙されて公卿の仲間入りをし、同年八月に参議、永暦二年(一一六一)九月に権中納言となる。そして、長寛三年(一一六五)八月に権大納言、永万二年(一一六六)十一月に内大臣、仁安二年(一一六七)に太政大臣と、異例の速度で昇進し、人臣の頂点に立つ。

これと併行して、平家一門は朝廷の要職を占取し、永万二年(一一六六)十月には、清盛の妻の妹が産んだ憲仁親王(高倉天皇)が皇太子となり、仁安三年(一一六八)二月に即位。治承二年(一一七八)十二月には、清盛の娘徳子が産んだ言仁親王(安徳天皇)が、生後一カ月で皇太子となる。そうしたさなかの嘉応二年(一一七〇)十月におきた事件を、覚一本『平家物語』でみよう。

ときは、十月十六日。この日、雪が降った。一三歳の平資盛は、雪景色を見物しに、侍を連れて京都北辺の山野に出かける。資盛は、平清盛の嫡男重盛しげもりの次男である。その帰路、資盛一行は、摂政松殿基房まつどのもとみさの乗る車と出会う。基房の従者は、資盛らが礼をとらぬのを咎め、馬から引きずり下ろす。

恥辱をうけた平資盛は、祖父清盛にその旨を報告。清盛は激高し、後日、兵三百騎に命じて参内する摂政の一行を待ち伏せさせ、従者の鬢もみぢを切るなどの乱妨をさせた。その後、事件を聞いた重盛は、父清盛とは逆に、これを非難。狼藉に及んだ侍らを勘当し、資盛を伊勢国で謹慎させたという。覚一本が「これこそ平家の悪行のはじめなれ」と記す、殿下乗合てんがのりあい事件である。

『平家物語』諸本が記す事件の真相については、確かな記録によると、いろいろ検討の余地がある。右大臣九条兼実くじょうかねざねの日

記『玉葉』^戦によれば、事件は十月でなく、七月に始まる(史376)。

まず、七月三日、摂政松殿基房と平資盛の車が京中で出会い、摂政の従者が資盛一行に恥辱を加えている。ところが、それを聞いて激高しているのは、祖父清盛ではなく、父重盛である。そして、七月五日段階でも、重盛の怒りは収まらず、しかも重盛の要求で摂政の従者が処罰されている。七月十六日にも、京都の二条京極^にに武士らが参集し、摂政一行を追捕するとの噂が流れている。

ややあつて十月二十一日には、武士らが参内しようとした松殿基房の従者を馬から引きずり下ろしたり、翌二十二日にも、従者の髻が切られたり、連日の狼藉が続いている。暴君化した清盛に対し、それを諫める聖人として重盛を描く『平家物語』諸本の描写とは裏腹に、重盛の報復は実際、執拗なものであった。

関氏の出自 さて、一見、亀山市域と関係ないかにみえる殿下乗合事件を紹介したのには、わけがある。この事件が、南北朝時代以降に鈴鹿郡一帯で活躍する、関氏一族の出自にかかわるからである。

『系図纂要』を始め、関氏の関係系図・由緒書・軍記物は、同氏の祖を平資盛の子盛国^{もりくに}にあてる(史³⁷⁷など)。『系図纂要』によれば、盛国の出生地は伊勢国鈴鹿郡久我莊^{くがのしやう}で、寿永二年(一一八四)に平家一門が「没落」した際、源頼朝が「小松氏」平重盛の「旧恩」に報いるため、盛国の身柄を鎌倉幕府の北条氏に預けたのだという。

だが、平家一門の西国落ちは寿永二年、滅亡は元暦二年(一一八五)のことで、源頼朝が平治の乱後の助命に際し、平重盛の「恩」を蒙った史実もない。また、盛国は史料上、実在が確認できない。

久我莊は、亀山市関町久我^{くが}(写真101)。殿下乗合事件で、平資盛が流されたとの伝承が残る。関氏の祖を資盛とする関係系図や由緒書の記載が、この伝承と関連することは、まちがいな



写真101 関氏ゆかりの地、久我（関町久我）

い。とはいえ、平資盛が伊勢国へ蟄居させられたという話は、覚一本『平家物語』などの語り本系のみにも見え、『平家物語』の読み本系や、他の信頼しうる史料では確認できない。さらに、久我に流されたとするのは、関氏の系図・由緒書・伝承のみである。

『系図纂要』は、盛国の子国房くにみさは久我荘で没したとし、国房の子として実忠さねただ・盛綱もりつなを載せる。まず、平実忠は実在が確認でき、鎌倉幕府編さんの編年史書『吾妻鏡』に、三代執権北条泰時の被官「関左近大夫将監」などとして散見する。

一方、平盛綱についても、実在が確認できる。北条泰時の子孫、得宗流の被官として権勢をふるう平・長崎氏の祖、平盛綱である。既往の研究では、平・長崎氏を平家一門の後裔とする『系図纂要』の記載を認める説もあるが、逆に否定する説もある。また『系図纂要』が兄弟とする関実忠と平盛綱の関係についても、現存史料からは判然としない。

結局のところ、平資盛と、関氏や平・長崎氏の関係については、不明とせざるをえない。とはいえ、五箇山ごかやま（富山県南砺市）や五家荘ごかのしやう（熊本県八代市）など、「コガ」や「ゴカ」は、平家落人伝説をもつ地域の地名として、広く列島各地に分布する。「クガ」（久我）は、それらに類する地名と理解することもできる。

第二項 治承・寿永の内乱と鈴鹿郡

諸国源氏の蜂起

平家一門が権勢をふるうにつれ、後白河院と平清盛の関係は悪化する。そして、治承三年（一一七九）六月の平家打倒計画（鹿ヶ谷しかがやの陰謀）の発覚をうけ、同年十一月、摂津

国福原(兵庫県神戸市兵庫区)に下つていた平清盛は、率爾に軍兵を率いて上洛。後白河院の近臣を解官し、後白河院政を停止する(治承三年のクーデター)。さらに、治承四年二月、生後一年三カ月の安徳天皇が即位。平氏政権は、危うさを抱えながら確立していく。

これに対し、治承四年(一一八〇)五月、後白河の皇子以仁王は、諸国に平家追討を命じる令旨を出し、同年五月、摂津源氏の源頼政らを率いて挙兵。だが、以仁王と源頼政は、大和国(奈良県)方面へ敗走し、伊藤景高・忠綱ら官軍の追撃により、敗死する。

とはいえ、挙兵の余波は、しだいに拡大する。同年八月以降、源頼朝、甲斐源氏の安田義定・武田信義、源(木曾)義仲らが東国で蜂起。そして以後、東国のみならず、畿内やその周縁部、さらには九州をもふくむ列島各地で反平家の戦端が開かれ、平氏政権は、鎮圧に逐われることになるのである。

そうしたなか、治承四年(一一八〇)十月には、平維盛を総大将、伊藤忠清・景家らを侍大将とする軍勢が、東国征伐のため下向。源頼朝・甲斐源氏の連合軍と、駿河国(静岡県)の富士川をはさんで対峙する。だが、合戦は、戦わずして平家方の大敗に終わる。また、同年十一月には、美濃(岐阜県)・尾張(愛知県)・近江国(滋賀県)といった近国の源氏が蜂起する。

伊勢国では、治承五年(一一八一)正月、熊野山悪僧の軍勢が紀伊国(和歌山県)から侵攻し、これを官軍の平信兼が迎え撃っている(史³⁸⁹)。そして、同月、平宗盛が、五畿内と伊賀・伊勢・近江・丹波国(京都府)の惣官に任じられ、畿内近国は軍政下におかれる。ところが、治承五年(一一八一)閏二月、一門の総帥平清盛が没する。平氏政権は、じわじわと傾きはじめるのである。

天下三分の形勢 その後、しばらく各地の戦線は膠着するものの、寿永二年(一一八二)五月、源義仲が越中国(富山県)と加賀国(石川県)の国境で平家軍を破り(倶利伽羅峠の合戦)、京都

へ向けて進軍。七月、平家一門は安德天皇や三種の神器とともに西海へ落ち、源義仲・行家ゆきいえらの軍勢が、相つぎ入洛する。ここに、東国を源頼朝、畿内近国と北国を源義仲、西国を平家一門がおさえる、天下三分の形勢が現出する。

とはいえ、新たに入京した勢力は、義仲・行家に加え、甲斐源氏の安田義定、近江源氏の山本義経やまもとよしつね・柏木義兼かしわざよしかねなど、独立する武士団の混成部隊であった。これ以後、入京勢力は徐々に分裂し、そのなかで源義仲は孤立を深めていくことになる。

そうしたなか、後白河院は、一連の勲功について評議し、源頼朝を第一、源義仲を第二、源行家を第三の勲功と認定する。そして、八月、朝廷は故高倉院の皇子尊成親王たかひら（後鳥羽天皇ごとてぼ）の即位を強行。北陸道に逃れていた故以仁王の皇子北陸宮ほくりくのみやを推す義仲の主張は、退けられた。

さらに、十月、源頼朝の申請をうけ、後白河院は「東海・東山諸国の年貢、神社・仏寺ならびに王臣家領の庄園、もとのごとく領家に随うべし」と命じる宣旨を発給する（寿永二年十月宣旨）。内乱で荒廃した東海・東山道の荘園公領支配の回復命令である。そのなかには「東海・東山道等の庄公（荘園公領）、不服の輩あらば、頼朝に触れて沙汰を致すべし」とあって、東海・東山道の支配回復を源頼朝にゆだねる内容をふくんでいた。

頼朝の当初の申請は、東海・東山・北陸道を範囲とするものであった。だが、北陸道は、この地域を進軍して入洛した源義仲の支配下にあり、現に義仲が京都を制圧している以上、後白河院は、頼朝の管轄から北陸道を除かざるをえなかった。とはいえ、源頼朝を勲功の第一とし、東海・東山道の支配を頼朝に認めたことは、義仲に「生涯の遺恨たるなり」といわしめるほどの不満を抱かせた。

鈴鹿山の攻防と「伊勢国民」　かくて宣旨の出された翌月の寿永二年閏十月、源頼朝は伊勢国に使者を派遣する。そして、ほぼ時を同じくして、伊勢国の「国民」が鈴鹿山を封鎖し、源義

仲・行家の郎党と合戦している。このころ、近江国は源義仲、伊勢国は源頼朝の勢力下であり、国境の鈴鹿山が攻防の舞台になったのである。

源頼朝からの使者は、名目上、前月の宣旨で下された命令を履行するために遣わされたものである。とはいえ、事実上は、伊勢国の「国民」と連携し、源義仲軍を牽制するために派遣されたにちがいない。美濃国の不破関でも、東西の睨みあいが続いている。鈴鹿関と不破関のそれぞれ東側では、源頼朝勢力の上洛戦の準備が着実に進んでいた。

ところで、ここで問題としたいのは、伊勢国の「国民」の内実である。近年、このとき源頼朝軍と連携した「国民」は、平家一門の西国落ちに随行しなかった「小松殿の侍」、すなわち平清盛の嫡子重盛の家人らと、他の国内外の有力武士からなる武士団連合であったとの見解が、有力になってきているからである。

治承三年（一一七九）五月に重盛、治承五年閏二月に清盛が没すると、平家一門の本宗は、重盛の弟宗盛の系統へ徐々に移行していくことになる。そうしたなか、故重盛の子息に仕える伊藤忠清や平貞能さだよしといった累代の有力家人は、平家本宗から距離をおくようになる。

伊藤忠清は、伊勢平氏の累代の家人。保元・平治の乱には平清盛の侍大将として参加し、そののちも「坂東八ヶ国の侍さむらい別当とう」として、東国の平氏家人を統括するなど活躍。重盛の嫡子維盛の乳母夫となり、富士川の合戦では、総大将維盛を補佐する侍大将として東下し、墨俣すのまたの合戦や、北陸道での源義仲追討戦にも参加した。能や歌舞伎の材に取られたことで著名な、伊藤景清かげきよの父である。

平貞能も、同じく伊勢平氏の累代の家人で、清盛のまたなき股肱の臣。軍事面でも、九州の反乱を鎮圧し、上洛後は重盛の次男資盛と行動をとにもする（図56・59）。そして、寿永二年（一一八三）七月、伊藤忠清は、一門の西国落ちに従わず、出家する。平貞能も、いったんは西国落ちに同行するも、同年十月、

九州で出家して一門から離脱する。

一方、両人とは別に武士団連合に加わった平（関）信兼は、伊勢平氏の傍流で、伊勢国中南部に強大な基盤をおきなながら、京都で活躍した軍事貴族である。信兼は、史料に「関出羽守信兼（史389）とみえることから、伊勢国北部の鈴鹿関一带に本拠が有したと、長らく考えられてきた。しかし、近年では、伊勢国中部の川口関（津市白山町川口）一带を本拠とする見解が有力である。

図 56 伊勢平氏略系図

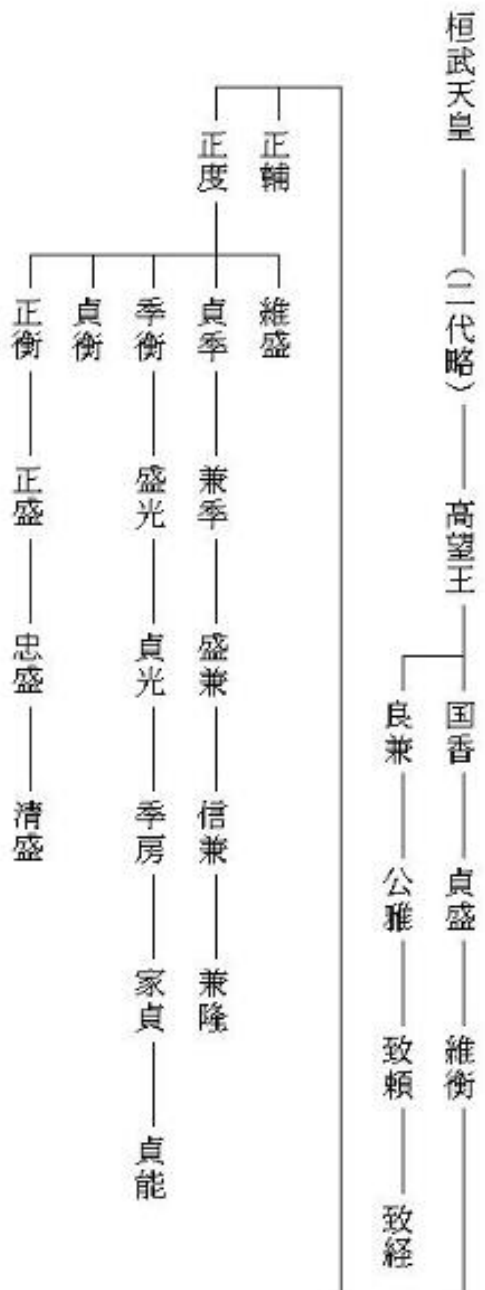
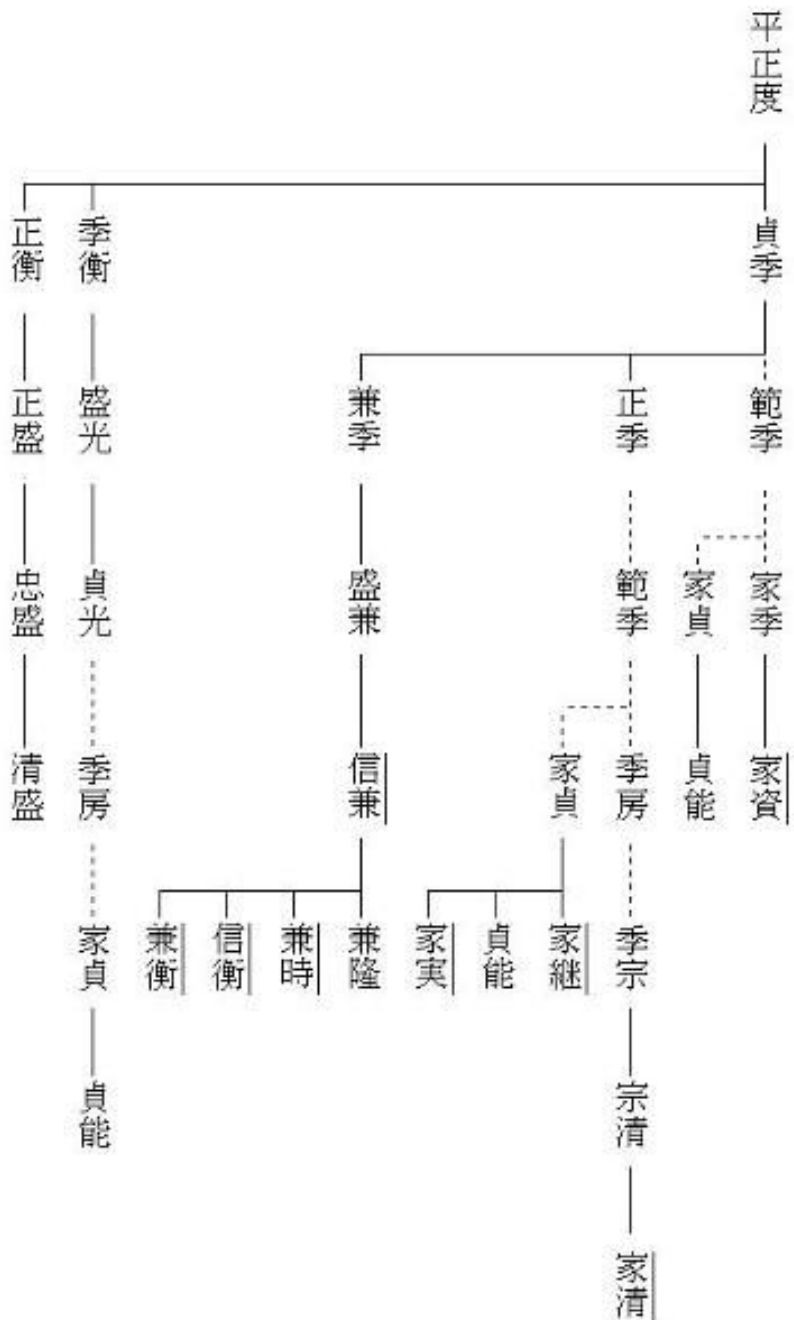


図 59 伊勢・伊賀平氏略系図

傍線は伊勢・伊賀平氏の乱の関係者、点線は系譜に諸説のあるものを示す。



信兼は、伊勢平氏嫡流の平清盛らとは別の、独立した武士団の長として、保元・平治の乱を生き抜き、その後も、前述のご

とく熊野山悪僧の伊勢国侵攻を迎え撃つなど官軍側で活動する。だが、平家一門の劣勢のなか、伊勢国にもどり、武士団連合に加わったらしい。ちなみに、源頼朝の挙兵で最初に襲撃された伊豆国目代の山木兼隆やまきかねたかは、信兼の子息である(図56・59)。
他方、同じく武士団連合に加わった平ひらた家継いえつぐは、伊賀平氏の末裔で、前出の平貞能の兄である。弟貞能のごとき中央での活動は確認できず、「平田入道」(史401)の呼称が示すごとく、伊賀国北部の山田郡平田(伊賀市平田)を本拠に活躍した(図59)。

かくて寿永二年(一一八三)閏十月、「小松殿の侍」に、平信兼・家継らを加えた伊勢・伊賀国の武士団連合が、源頼朝軍と連携しつつ、源義仲の軍勢と鈴鹿山で対峙したのである。上洛の機は、熟した。天下三分の形勢が破れるのは、まもなくである。